

潮 流

「我々はポピュリスト政治の森から抜け出せていない」

理事研究員 高島 浩

これは、英国の国際政治アナリストが現在の欧州の状況について述べたものである。2016年の国民投票による英国のEU離脱に象徴されるように、昨今、欧州におけるポピュリズム政党の台頭が欧州各国の政治的な混乱要素となっている。昨年、フランスにマクロン大統領が誕生し、ようやくポピュリズム政党の台頭に歯止めがかかったように見えたが、昨年後半のドイツ総選挙および3月のイタリア総選挙では、これまで政治の主導権を握っていた既存政党が弱体化。再び、極端な主張を展開する非主流の政党、とりわけエリートによる政治に異議を唱える政党が勢力を拡大しつつある。

米国においても、一昨年の選挙でトランプ大統領が誕生した。トランプ大統領の主張は、エリートによる政治支配を否定し、これまで忘れられていた人々に政治参加を呼びかけ、「米国第一主義」の掛け声の下、支持者のためであれば外国との関係を悪化させる政策でも取り組むとの極端なものである。就任後1年間の取り組みを見てみると、彼の過激なツイートや言動はあるものの、大型減税、規制緩和など経済にポジティブな影響を与える政策が実現し、エリートを含む伝統的な共和党支持母体に安心感を与えた。しかし、秋の中間選挙が事実上スタートした現在、支持母体の利益となる鉄鋼・アルミへの追加関税導入など、再び、「選挙時のトランプ」が復活しつつある。

ポピュリズムの性格についてはさまざまな解釈はあるが、プリンストン大学のヤン＝ヴェルナー・ミュラー教授の著書（『ポピュリズムとは何か』）では、「反エリート主義」であることに加えて、「反多元主義」という特徴があると指摘している。すなわち、エリートは腐敗しているとし、また、自らの主張にあわない人々を怠惰なマイノリティとして排除する傾向があると整理している。政治経済の専門家が政策の非合理性を主張し、国民が極端な政策に異議を申し立てても、支持者以外の声を聞き入れない。むしろ、反対意見を述べるメディアや政党に対し厳しい攻撃を行い、自身の政策こそが国民の利益にかなうとの主張で支持母体に訴える。支持者と非支持者との分断がより鮮明になる。

仮に、イタリアの連立交渉においてポピュリスト政権が誕生した場合、ドイツ・フランスが進めようとする欧州の更なる統合に向けた動きに水をさすこととなりかねない。加えて、来年春には欧州議会選挙へも影響を与え、欧州全体の政治への影響も懸念される。

一方、米国では、中間選挙では反トランプで結束した民主党が少なくとも議会下院で過半数を確保するとの予想が多いが、これでトランプ政権が4年で終わることを意味するわけではない。トランプ大統領は、中間選挙後の政権運営が不安定となった場合の責任を彼に反対する政党や国民のせいであると主張し、自身の取り組みこそが国民が求めているものであると支持者に訴えることが容易に想像できる。こうした主張が支持されれば、2年半後にトランプ大統領が再選される可能性が高まる。

欧米とも政治的に不安定な状況が継続する可能性は高いのではないかな。